

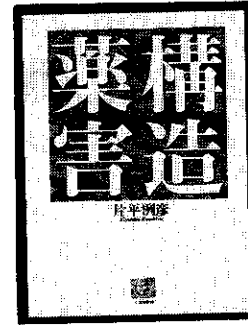
〈書 評〉

構造薬害

片平洸彦 (かたひらきよひこ)

19cm 250頁

農山漁村文化協会 1994年



エイズサーベイランスから血液製剤受注による患者・感染者が対象外となり、すでに感染者の新規発生はないとして「過去の不幸な歴史」となりつつある薬害エイズを衛生行政に携わる私たちがどう考えるべきかを教えてくれる本が出版された。公衆衛生院でエイズ対策コースが行われるようになり図書館にもいろいろなエイズ関連書がそろってきた。その中にも薬害エイズがなぜ起こったか、という問題を取り扱った出版物はいろいろとあるが、この書はそれにとどまらず薬害スモンをはじめとする多くの薬害とその問題発生の構造が類似していることを示している点に特徴がある。

「クスリ」は逆さに読むと「リスク」である。どのような医薬品にも必ず副作用という危険が伴うものであるからその使用には十分注意が必要であると学生時代に教わったことがある。私は、副作用は医薬品を使用するときにはさげられないものであると思うが、問題はそれが認められた後の対応にあると思う。残念ながらわが国で起こった数々の薬害事件は医薬品の副作用への対応が不適切であったがために「薬害」事件にまで発展してしまったものである。

わが国で起こった薬害の共通点を知ることで、庶民の命より企業の利益が優先される世の中では薬害発生は必然であることが思い知らされる。スモンなどの薬害発生から数十年を経ても、薬害を起こす社会背景が全く変わっていないことに驚かされるし、残念ながらこの薬害を起こす社会構造が変わらない以上次の薬害が必ず起こることも容易に予想できる。

薬害エイズの被害の実態がわかることもこの書の特徴ではあるが、それより今の若い世代が恐らくあまり知らないであろう薬害スモンの被害者の実態やどのようにしてその薬害が起こったかを知ることがわが国の薬害を起こす社会の仕組みを知る上で大変役に立っていると思う。本書を読むと、いかに国、企業、主治医達が取り返しのつかない大きな罪を犯したかを認識でき、憤りを感じずにはいられない。このような読後の感情を覚える本は薬害エイズに関連したものでは沢山あるが、この本はこれから薬害を起こさないためには我々がどうしたらよいかを述べている章があるので救いがある。衛生行政に携わる者は、さらに公衆衛生のプロとして自分に何ができるかを考えながら読んでほしい。公の立場として薬害エイズの問題解決を支援できることは限られるかもしれないが、今後の薬害が起こることを未然に防いだり、薬害の発生をすばやく感知し被害の拡大を防ぐことは日常の仕事の中でも可能なはずであるし、国民の健康を守る者としての義務でもあるはずである。

岩波新書の「安全性の考え方(武谷三男著)」「薬の安全性(砂原茂一著)」、筑摩書房の「裁かれる現代医療(高橋暁正、水間典昭著)」「サリドマイド禍の人びと(宮本真左彦著)」、講談社ブルーバックスの「疫学とはなにか(重松逸造著)」はこの問題に関連した本である。興味のある方はこれらの本も読まれることを勧める。

尾崎米厚 (疫学部)